

高専入試本番そっくり🍎模試

国

語

次の(1)から(8)までの傍線部の漢字表記として正しいものを、アからエまでのの中から選べ。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | コ有の文化。 | ア | 孤 | イ | 個 | ウ | 固 | エ | 故 |
| (2) | 心キ一転。 | ア | 機 | イ | 起 | ウ | 期 | エ | 記 |
| (3) | 設備の点ケン。 | ア | 険 | イ | 俟 | ウ | 検 | エ | 剣 |
| (4) | 腐ハイする。 | ア | 排 | イ | 廃 | ウ | 配 | エ | 敗 |
| (5) | 互カクの戦い。 | ア | 格 | イ | 角 | ウ | 各 | エ | 画 |
| (6) | 憲法をセイ定する。 | ア | 制 | イ | 製 | ウ | 成 | エ | 正 |
| (7) | 学業をオサめる。 | ア | 納 | イ | 収 | ウ | 修 | エ | 治 |
| (8) | 面接して新社員をトる。 | ア | 捕 | イ | 執 | ウ | 撮 | エ | 採 |

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1)

勅撰集の歴史でいうと、十一世紀、平安時代の後期に入る頃に成立した第四の勅撰集『後拾遺集』から、「秋の夕暮れ」という歌句がよく出てくるようになる。特にこれを第五句に置いて

A

にした歌が多い。『新古今集』にはこの句を第五句に置いた歌が十六首も出てくる。その中で特に巻四(秋歌上)に並んで出てくる次の三首は、

「三夕の歌」と呼ばれ、名歌とされてきた。

さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮れ

(寂しさはことにとの色によるというわけでもないことだ。真木の茂り立つ山の秋の夕暮れは。)

こころなき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕暮れ

(季節の趣を解する心もない私にも、しみじみと知られるよ。鳴の飛び立つ沢の秋の夕暮れのあわれは。)

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

(見わたすと花も紅葉もないよ。粗末な苫葺きの漁師小屋が並ぶ、浦の秋の夕暮れは。)

一首めは真木(杉・檜などの高木を誉めていう語)が茂るやや深い山里の秋の夕方を詠む。紅葉とか鹿の鳴き声とか特定のものが催す寂しさでなく、山全体に感じられる森閑とした寂しさを詠んでいる。平安時代の美意識とはかけ離れたものがある。

二首めも平安時代の普通の美意識からすると決して「あはれ」ではない鳴立つ沢の寂しさを「あはれ」と言っている。

三首めは寂しい海辺の光景を詠むが、「花も紅葉もなかりけり」と、打ち消しのヴェールに包んで、花・紅葉の面影を匂わせた趣向の一首である。寂しい無色彩の風景の中に、追憶のように、幻影のように極彩色の花・紅葉が置かれている。この一首は、『源氏物語』の「明石」の巻、光源氏が京から身を引いて明石の浦にさすらう話を踏まえている。否定に包まれた花・紅葉は、懐かしむ京の花・紅葉なのである。

三夕の歌は中世の自然観の特徴をよく表している。平安貴族の美的、情緒的な自然観を乗り越えて、むしろ荒涼たる景を好んで見つめようとし、また美しい花や紅葉の景をも、いったん遠ざけ、寂しい景のヴェールをかぶせてその奥に見るのである。幽玄の美であり、わび・さび・枯淡などといった美意識にも繋がる。日本人は現在でも嗜好心などがあって、衣服や室内装飾など、少しくすんだ混合色を好む。また谷崎潤一郎は随筆『陰翳礼讃』に、居室も微光や陰あるものを、食器も磨き上げて輝くものより少し錆びた色のものを好む日本人の特質を指摘している。これらも中世のこ

う美意識を基盤にしていると言えるのではないだろうか。これは平安貴族の華やかな美意識を乗り越えようとした、隠遁者・宗教者(僧侶)・武家など、また没落衰退の時期を迎えた貴族の子孫たちが築いていった、この時代の産物でもあった。「秋の夕暮れ」は、万物の生命が衰える秋と一日の陽射しが衰える夕暮れを合わせたものであって、まさしくそうしたこの時代の心の風景によく適合している。

時代は下るが、鎌倉時代の終わりに兼好法師は次のように言っている。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行くへ知らぬも、なほあはれに情けふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さほることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。

(花は真つ盛りを、月は満月をばかり見るべきものだろうか。雨空に向かって月を恋し、簾を垂らし、閉じこもっていて、春の過ぎるのを知らずにいるというのも、なお B。咲きそうになった木の梢や、花が散り萎れた庭なども見どころが多い。歌の詞書も「花見に出かけたのにすでに散りすぎてしまったので」とか「差し障りがあつて出かけずにいて」などと書いたものは、「花を見て」といったものに劣っているだろうか。花が散り、月が傾くのを惜しみ慕う習いももつともだが、ことにものをわきまえぬ人は、「この枝もあの枝も散ってしまった。もう見どころもない」などとは言うようだ。)

春の花盛りや秋の名月だけが風情のあるものだろうか、隠されている状態にあつてそれらをしのぶことにこそ真の風情がある、というのはまことにもつともで、今日の私たちも、海や山に出かけて夏を満喫するのもよいが、それを期待し想像しながら待っている夏休み前の楽しさというものも知っている。何気ない感想のように見えるけれども、ここにも中世の人の心の特徴が感じられる。ことに好季の前だけでなく、「散りしをれたる庭」が見ど

ころ多いと、花の季節が去った後の庭の趣に注目しているところは、かなりひねりの加わった風景の見方で、中世人的である。

この段は『徒然草』の中でも特に長文の段で、さらに続けて兼好法師は葵祭の祭見物人（あきまつりのおきもの）のようすについて述べ、花盛り、名月ばかりを見ようとする人は、祭見物でも行列が目の前に来るまでは見物席の外で酒を飲んだり、囲碁や双六に興じていて、行列が来た時だけ押し合って出てきて見るが、これは真に祭の風情を理解していないと言う。さらに言う。

暮るるほどには、立て並べつる車ども、所なく並みあつる人も、いづかたへか行きつらん、ほどなく稀になりて、車どものうがはしさもすみぬれば、簾・畳も取り払い、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

（日が暮れる頃には、立て並べた車、すきまなく並んでいた人も、どこへ行ってしまったのだろうか、急に稀になって、車の群れのつたがえしも終わり、簾や畳も取り払い、見る見る寂しげになってゆくこそ、この世は無常であるという定めも思い起こされて感慨深い。祭の後の大通りを見るのこそ、祭の神髄を見たことになる。）

ここにも同じ考え方が見えているが、特に波線部に注意していただきたい。祭の後の人けがなくなった大通りを見るのこそ、真の祭見物だと言い、それは人の世の無常の定めも思い合わされるものだ、と書かれている。

こういう見方は、明らかに戦乱に明け暮れた中世の時代の中で築かれた無常観から出たものである。そうすると花盛りや名月だけを見るのが、花や月の美しさを真に見ることではないという考えも、やはり中世の思想に媒介されたものだということになる。世の真実を深く見ようとする心が、自然の見方を変えている。兼好はこの段の別な箇所で、「すべて月花をば、さのみ目にて見るものは（いったい月や花は、そのように目ではかり見るものだろうか）とも言っている。目でなく心の目で見なければならぬ、ということだろう。そこに中世人の心がある。先に見た中世の歌人たちの秋の夕暮れを詠む歌々とも通じ合っている。

（森朝男『読みなおす 日本原風景』による）

（注1） 勅撰集Ⅱ勅命（天皇の命令）によって編集された漢詩文集や和歌集。

（注2） 幽玄Ⅱはかりしれないほど奥深い情趣。

（注3） 谷崎潤一郎Ⅱ一八八六～一九六五。小説家。代表作に『細雪』など。

（注4） 隠遁者Ⅱ俗世間から離れて暮らす者。

（注5） 兼好法師Ⅱ鎌倉末期から南北朝期に生きた歌人・随筆家。

問1 空欄 A に入る和歌の修辞技法を、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 擬人法 イ 掛詞 ウ 枕詞 エ 体言止め

問2 本文中の(a)から(d)の「ある」のうち、他と異なるものを次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア かけ離れたものがある。 イ 花・紅葉なのである。 ウ 蔭あるものを、 エ 風情のあるものだろうか、

問3 本文中に「打ち消しのヴェールに包んで、花・紅葉の面影を匂わせた趣向」とあるが、どのような趣向か。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 花や紅葉が見えないと詠むことによって、不在による寂しさやわびしさをより強く感じさせようとする趣向。
イ 花や紅葉が見えないと詠むことによって、視覚以外の感覚による表現をしみじみと味わわせようとする趣向。
ウ 花や紅葉が見えないと詠むことによって、春や秋などの季節にかかわりない美を見いださせようとする趣向。
エ 花や紅葉が見えないと詠むことによって、夢や幻のように色彩の豊かな情景を思い浮かばせようとする趣向。

問4 『徒然草』の本文中に「あはれに情けふかし」とあるが、それに対応する現代語の表現として空欄 B に入れるのに最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 興味深いものだ イ 気の毒なものだ ウ 趣深いものだ エ 悲惨なものだ

問5 本文中に「かなりひねりの加わった風景の見方」とあるが、ひねりの加わった見方とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア ものごとの始まる前に期待しながら待つのが楽しいだけでなく、それが終わった後にも見どころがあるとする見方。
イ ものごとの全部を見てこそ楽しさが分かるはずなのに、何も見えない状況の方が本当の楽しさが分かるとする見方。
ウ ものごとの行われている真っ最中に風情を感じるだけでなく、始まる前の期待感にこそ趣を見いだそうとする見方。
エ ものごとが終わってしまうと寂しい思いがするはずなのに、終わった後に次を期待して待つ方が趣深いとする見方。

問6 本文中に「先に見た中世の歌人たちの秋の夕暮れを詠む歌々とも通じ合っている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 貴族である「三夕の歌」の歌人たちと隠遁者である兼好とが、ともに没落した階級の者としてお互いに理解し合っているということ。
イ 中世に築かれた無常観という思想を描き出す上で、兼好は「三夕の歌」の歌人たちの歌を手本に『徒然草』を書いているということ。
ウ 目に見えるものの奥にある趣や真実をさぐり出そうとする点で、兼好と「三夕の歌」の歌人たちとの思いが一致しているということ。
エ 平安貴族が持つ華やかで情緒的な美意識が、伝統的美意識として兼好や「三夕の歌」の歌人たちに共通して伝わっているということ。

問7 この文章の内容や構成に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選べ。

- ア 『陰翳礼讃』に見られる現代人の嗜好みが、『三夕の歌』に始まり『徒然草』で頂点に達する事情を、本文の丹念な読解により論じている。
- イ 平安貴族の華やかな美意識が、中世的な美意識に変化し深められていく経緯を、『三夕の歌』と『徒然草』を例として具体的に論じている。
- ウ 『三夕の歌』にはまだ残っていた平安時代の美意識が、中世になって消え去るに至る状況を、『徒然草』との対比により鮮明に論じている。
- エ 貴族の時代に芽生えた美意識が、『源氏物語』や『徒然草』、『陰翳礼讃』などに時代を超えて表現されていた過程を総合的に論じている。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学的知識は、原理的にはどこまで行っても絶対的な正しさを保証され得ない。科学者のネットワークにおける議論を通してスクリーニングされ、徐々にその信頼性が高まっていき、多くの科学者が認める公の知となつて、時には「科学的事実」なる称号を得る。だが仮にそうなくても改訂可能性はいつも開かれている——当然、その確率は、かなり低いだろうけれど。だからこそ科学は、「人類にとって最も信頼に足る知」というステータスを得たのである。^(注1)

したがって、雑誌にどんな論文を載せるべきかの基準としては、一定の科学的根拠が具備されていることは必要だが、何よりも、既存の科学知の体系に対するインパクトの可能性が重視される。

もちろん、その科学的な発見がその後どう発展するかは、分らない。分らないから研究する意味があるのだから、それは当たり前だ。実際のところ、有名雑誌に載つても、その先の発展がなかったり、そもそも内容が間違つていたり、あるいは研究の意義がなかったりして、誰からも忘れられてしまう論文は、山ほどある。^(注2) Nature の場合には、たとえば米国の Science 誌に比べると、結果的に質の悪いものを載せる失敗よりも、載せるべき重要な論文を載せない失敗を避けることを、やや重視する傾向があるように思う。この考え方は、科学の本質に照らしても健全であろう。

要するに科学という活動にとって、「面白さ」は非常に重要なものだ。そこから何か凄いことが始まるかもしれない、という予感のようなもの。脳髓がヒリヒリするような、心臓がワナワナするような、そんな高揚感。おそらく、一流の科学者なら皆、その感覚を共有しているはずだ。それこそが、科学という活動を駆動するメイン・エンジンであることは、間違いない。

したがって、とりわけ先端的な科学に携わる者たちは、探検物語に対してワクワクする子供の心情と、ある意味では類似する情動に駆動されているし、またそうあるべきだろう。だが果たして、それだけでよいのだろうか。何か重要なことを忘れていないか。

それは、科学は技術と結びついて、我々の社会を激変させているという事実である。このことを忘れて科学を考えることはできない。

A

英国の場合、Nature 誌が典型的だが、未知へのロマンの重要性を科学界は重視しているように思われる。だが同時に英国は、科学が社会にとつてどういう意味を持っているのか、そのリスクや倫理に関して、社会の他のアクターも含め、皆で冷静に考え直すという活動を、最も早く始めた国の一つでもある。その背景には、二十世紀後半に明らかになった、科学技術の負の側面に対する反省がある。特に英国の場合、BSE(狂牛病)問題への対処の失敗が、科学に対する社会の態度に大きな影響を与えたといえる。

要するに、子供の「ワクワク」を無邪気に延長していったら、巨た事故や環境破壊、そして新たな疫病の蔓延^{まんえん}が待っていた、ということなのである。世界はこういう問題について、一九七〇年代頃から真剣に考え始めた。そしてどうやら、二十世紀の終わりから二十一世紀にかけて、「科学」のあり方が変容したのである。^(注3)

そのことを最も顕著に示す例としては、一九九九年にハンガリーで行われたある国際会議について言及するのがよからう。これは「ブダペスト会議」と呼ばれ、国連教育科学文化機関(UNESCO)と国際科学会議(ICSU)が共催で、世界の英知を集め、新時代の科学のあり方を議論したのである。

その結果採択された通称「ブダペスト宣言」では、新時代の科学の責務として以下の四つが掲げられた。「知識のための科学(進歩のための知識)」、「平和のための科学」、「開発のための科学」、そして「社会における科学と社会のための科学」である。先ほどの「ワクワク」と直結するのは、冒頭の「知識のための科学」であろう。未知の領域に乗り出していく興奮がそこにある。

B

今や、それだけでは許されない時代に入ったと考えるべきである。科学はあくまで社会のなかの活動であり、他の活動と決して無縁ではなくなったのである。

だが日本では、「科学は社会のためにあるのだ」と叫んでも、驚く人は少ないのではないか。まさにそのことが、この社会に科学があまり根付いていないことの証左だと考える。^(注4)

そもそも最近の日本は「ワクワク」を軽視する社会だろう。少なくとも公の場では、「ワクワクすること」よりも「ちゃんとやること」の方が、遥かに重視される。ワクワクがなければ、先ほどの「知識のための科学」は発展しないはずなのだが、どうやら元々この国で「科学」とされていることのほとんどは、「科学に基づく技術」のことだったので、特に問題はなかったのである。

C

ホンモノの科学知自体は基本的には輸入してくればよいと信じられてきた。その証拠に、日本の大学で長いこと重視されたのは、外国の知識をいち早く正確な日本語に翻訳する能力だったし、企業も、公共の知となった基本原理を自由に使つて、より性能の良い製品を作ること熱中してきた。そこには「ヒリヒリするようなワクワク感」は要らないだろう。したがって、この国では「工学」が興隆する。世界で初めて University に「工

学部」を設置したのが東京大学であることは、それを象徴している。最初から、「産業のための科学」のことにしか関心がなかったのだ。

かつてはそれでよかった。最適化された社会だった。しかし過剰適応した生物は、環境変化に弱い。たぶん、失われた二十年だの三十年だのというのは、とくに日本は世界で最先端の国になっているのに、昔と同じように「科学知」を外から無料で輸入し、それを「ちゃんとした製品にして売る」というビジネスモデルにすぎり続けていたための停滞だろう。

いやもちろん、問題の根本に気づいている人も多いのだが、どうも「真ん中」にいる人たちは往生際が悪いようだ。まあ、「ワクワクする心」を育てる機会に乏しかった、この国の中堅／エリート層にとっては、「今更そんなことを言われても」というのが、本音かもしれないが。

そもそも長年にわたって「理科」は、「唯一の正解がある科目」と見なされてきた。「改訂されうるが故に、信頼すべき知」というポパーの言う科学像とは、まるで違うものである。

そして、さらにその背景には、やはり歴史的な経緯があるといわざるを得ない。科学は一神教を母体に生まれた世界観、すなわち「世界は一つのシステムである」という信念に基づいているのだが、日本を含めたアジア等ではその大前提が元々共有されていない。非西欧圏における「科学」について、改めて考えるべき時代が来ているのではないだろうか。

というわけで「近年の日本の科学界では、さまざまな不祥事が頻発し、日本の科学のあり方が揺らいでいるのは何故か？」などという問いは、焦点がボケている。ただし日本人も悲観することはない。先ほどのブダペスト宣言で語られていることは、見方を変えれば、科学のあり方が日本におけるそれに接近した、ともいえるからだ。応用あつての科学、社会(産業?)のための科学、それをかれこれ百五十年頑張ってきた日本は、意外なところで、世界に対して貢献できるかもしれないのだ。

(神里達博『文明探偵の冒険』による)

(注1) スクリーニング＝選別すること。

(注2) ステイタス＝地位。

(注3) Nature＝英国の科学雑誌。なお、Scienceは米国の科学雑誌。

(注4) アクター＝出来事や事柄の関係者。

(注5) 失われた二十年＝日本経済が一九九一年から約二十年にわたり低迷した期間を指す。

(注6) ポパー＝二十世紀の科学哲学者。

問1 空欄 A、B、C に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

- | | | | | | | | |
|---|--------|-------|-------|---|--------|--------|-------|
| ア | A＝ちなみに | B＝だが | C＝実は | イ | A＝たとえば | B＝しかし | C＝一方で |
| ウ | A＝たしかに | B＝そして | C＝つまり | エ | A＝おそらく | B＝要するに | C＝さらに |

問2 本文中に、科学は、「人類にとって最も信頼に足る知」というステイタスを得た とあるがそれはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

- ア 科学者たちが、実験よりもネットワークにおける議論を重視していつも仲間同士で競い合ってきたから。
- イ 長い歴史を通じて、有用性の実証された知のみが科学的事実であると承認されるようになってきたから。
- ウ 真実を明らかにするために、誤りはいつでも訂正するという柔軟な姿勢を科学者が持ち続けているから。
- エ 科学的事実として多くの科学者が認める公の知が、後に否定される可能性はかなり低いと思われるから。

問3 本文中に、この考え方は、科学の本質に照らししても健全であろう。とあるがそれはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

- ア 内容の正確さに欠けるとしても、既存の科学的知識を否定するような影響のあることが論文掲載の基準であり、科学への信頼につながるから。
- イ 既存の科学的知識に与える影響の大きさが論文掲載の基準であり、研究者の記憶に残る質の高い論文の掲載が雑誌の存在意義につながるから。
- ウ 既存の科学的知識を乗り越える発展性が見込まれることが論文掲載の基準であり、高揚を感じさせることが未知の領域の解明につながるから。
- エ 正確さもさることながら既存の科学的知識に対する影響がどれくらいあるかが論文掲載の基準であり、面白さを追求することにつながるから。

問4 本文中に、「科学」のあり方が変容した とあるが、どのように変容したと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

- ア 興味関心にしたがって未知の領域を探索するだけでなく、社会の中のさまざまな活動と結びつけて考える必要性が高まった。
- イ 産業のための科学にとどまるのではなく、知識のための科学を発展させることで科学知を社会に役立てる必要性が高まった。
- ウ 未知へのロマンを追求することを諦めて、その技術が引き起こす問題への対処法について事前に検討する必要性が高まった。
- エ 興味関心のある領域で研究してきた科学者が、社会をよりよくするために英知を結集して共同で研究する必要性が高まった。

問5 本文中に、この社会に科学があまり根付いていない とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

- ア 日本では、絶対的な正しさが保証されていない外国の科学の成果をそのまま受け入れることに不信感を抱く人々が多いということ。
- イ 日本では、知的好奇心にしたがって研究を進めるといふ科学に対する西欧的な考え方がそれほど受け入れられていないということ。
- ウ 日本では、自分の専門分野での研究業績しか考えない科学者が多く、それが社会に及ぼす影響は顧みられてこなかったということ。
- エ 日本では、科学は研究者を中心としたごく一部の専門家だけのものであり、一般の人は科学に対する興味関心が少ないということ。

問6 本文中に、過剰適応した生物は、環境変化に弱い。とあるが、これはどういうことを比喩的に表現しているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 近代以降、科学上の成果を外国から輸入して技術に応用することに終始していた日本の科学には、後年、自分で科学知を生み出していく必要にせまられてもその力がなかったということ。

イ 科学者の好奇心を最優先し、科学的真実の追究に明け暮れてきた伝統的な西欧科学の世界には、科学を社会に活用するという現代的な要請に対応できる価値観は育たなかったということ。

ウ 科学を社会の中に位置づけるために、基本原理の研究よりも応用的な分野での研究を優先したことで、近い将来、科学そのものの進展が望めなくなる状況に陥る危険性が高いということ。

エ 科学という文明がもたらす利便さの中で生活することに慣れきってしまった人類は、もはや科学がなくては一日さえも生活できないほど弱くか弱い生命体になってしまったということ。

問7 本文中に、⁽⁶⁾まるで違うもの とあるが、どのような点で違うと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 一神教的世界観による西欧の科学に対し、日本ではその大前提が共有されていないことで本来の科学に対する認識のあり方が根本的に異なるものである点。

イ 日本の科学界で近年不祥事が頻発しているのは、唯一の正解を求める科学教育の影響であり、信頼性を重視する科学本来のあり方とは異なるものである点。

ウ 日本が世界最先端の国になれたのは、独創性より産業のための科学に力を注いだ結果であり、面白さを追求する科学本来のあり方とは異なるものである点。

エ 用意された正解にたどり着くことを重視してきた日本の科学教育は、修正を加えながらより正しいものを目指す科学本来のあり方とは異なるものである点。

4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私には、二歳年上の姉がいた。

男兄弟しかいなかった母親は、姉妹、というものに何か格別の思い入れがあったらしかった。物心ついた私の、最初の冬のコートは、姉とおそろいの、落ち着いた色合いのピンクだった。歩けるようになったばかりの私と、三歳だった姉は、どこへ行っても、まあ、おそろいなね、可愛らしい、と目を細められた(らしい)。

泣き虫だった私は、外出先で姉の姿が見えなくなると、すぐに、「おねえちゃん」と、口を歪めて大声で泣いた。すると磁石のように、同じコートを着た姉がどこからともなく駆け戻ってくる。私は姉のコートの裾をつかみ、更に大声を上げて泣く。そんなシーンも、⁽¹⁾母親には満足を与えたりし

た。それだけなら良くある話なのだが、母はなんと、その同じコートを大きき別に九着も用意した。それだけの数がよくあったものだと思うが、子ども向けのブランドのその店では、同じデザインのそのコートが——サーモンピンク、白いボタン、^(注1)Aライン——サイズ違いで九着、存在していたのである。

母のいい分はこうだった。

おそろいを一組しか用意しなかった場合、妹の私が大きくなって、姉のコートを着る頃には、姉には違うコートを買ってやらなければならない。そうすると、「おそろい」は成立しなくなる。小さくなった姉のコートを妹に回す、という経済的にも納得がゆく年中行事と、かつ麗しい「姉妹のおそろい」が、両方成立し続ける、というコースを遵守するには、同じデザインのコートが手に入るときに、全てのサイズを手に入れておくしかなかった、というのである。かなりの出費だったが、将来を見越しての賢い投資のようなものだから、実家に金を無心して何とか全て手に入れた、と得々としていう。イメージションがあるのかないのかわからない。⁽²⁾ありすぎるのとなさすぎるのの両方だろう。

⁽³⁾小学校に入る頃にはもう、逃れようのない宿命の重さに、秋になるたび憂鬱になった。馬鹿な友人は、私が同じコートをずっと着続けていると思うたららしい。どんなに大きくなっててもそのコートはついて回る。その絶望感姉も同じだっただろうが、私よりは若干ましだっただろうと思う。なぜなら姉は(同じ色、同じ型とはいえず)新品に袖を通せたわけだから。

新品だなんて。後日姉は憤懣^{ふんまん}やるかたない、という表情でいった。新品だからいいなんて、とんでもない話だわ。考えてもごらんよ。まつさらの状態から、いろんな日々を経てようやくある程度自分になじむものになってきた、それなのにまた全く同じ品が目の前に現れて一からつきあい始めないといけないのよ。無理矢理リセットさせられるのよ。あんたはいいわよ。前回と全く同じもの、というわけではなかったでしょう。

それは確かにそうだった。わずかな「へたれ方」や「型くずれ」は毎年違うものだった。もともと、それは私たち二人以外にはわからないものだった。ろうけれど。

いちばん大きなコートは、ほとんど新品だった。十六になった姉は、さすがに嫌がって、おこづかいを貯めてこっそり自分の好きな冬用ジャケットを買い、それでふた冬を過ごしたからである。私は最後にその、「ほとんど新品」に袖を通すことができた。昔からの友人知人の集まりに、そのコートを着ていくのは、さすがにうんざりするものがあつたが、そうでないときには、つまり、初めて出会う人や初めて行く会への出席とかには、姉ほどは嫌ではなかったと思う。

実のところ、そのコートは私に似合っていたのである。

そして、姉には、気の毒なことにあまり似合っていなかった。姉はボーイッシュで、^(注2)ユニセックスな服装が似合った。姉がそのコートを着ると、悪いが男性と生まれたひとの女装のように思われた。姉にもそのことはよくわかつていたと思う。同じ遺伝子をもって生まれてきたのに、神様も酷なことをするものだ。姉の着古したコートの呪縛から離れ、私は姉と違う人生を生きていることを実感していた。

姉は高校を卒業すると、南米へ旅立った。昔からインカ帝国に興味を持ち、遺跡を回るのが夢だったのだ。もう、向こうではコートなんか着る必要はないんだろうな、と私は最後の日、ウィンドブレーカーを着た姉を送り出しながらぼんやり思った。

数ヶ月後、そのウィンドブレーカーは、姉の他の荷物と一緒に送り返されてきた。姉は現地のバスに乗って事故に遭い、落命していた。

旅行会社の手配した飛行機で家族とともに現地に渡り、^(注2)諸々の事務的な手続きが終わり、日本に帰ってきて、通夜、葬式も済ませ、数ヶ月がたち、気がついたら冬が来ていた。

冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。昔からのコートが、まとめていれてあるものだった。なんとなくぼんやりと、その中から、一番小さなコートを取り出し、その上に次に大きなコートを重ねてみた。そしてその上にはまた次に大きなコートを。そうやって、順繰りに着せ込んでいくと、最後にはロシアの入れ子人形のようになり、人間のように立体的に膨らんだ。一番下の、一番小さなコートは私だ。姉はこれを着ていない。次からの数枚は、裾のところにかすかなたるみが出てくる。私がしょっちゅう、姉にしがみついていた跡だ。姉と、私の、二人の冬が、混濁して、ない交ぜになって、姉から守られているようでもあり、育まれているような気にもなった。そうだ、思い出せば、姉はいつも、私を氣遣っていた。最後のコートを着たがらなかったのは、^(注2)もしかしたら、いや絶対、物ごころついてからは新品を着たことがなかった私のために、それを新品のまま渡してやりたかったからではないか。そういうえば、私が最後のコートに手を通したとき、「やつぱり、あんたにはそれ、似合うよ」と、満足そうにいつていたではないか。

一枚一枚に付いた、小さな染みやほころび。姉と私以外、誰も知らない、^(注2)私たちの人生の重なった、入れ子人形のいちばん上に、姉が遺したウィンドブレーカーを着せた。

「おねえちゃん」

小さかった頃のように、そう呼んだら、自然と口が歪み、小さなコートの私が、ウィンドブレーカーの裾をつかみ、わんわん声を上げて泣いた。

(梨木香歩『丹生都比売 梨木香歩作品集』による)

(注1) Aライン＝アルファベットのAのように肩から裾に向かって広がるシルエットの服。

(注2) ユニセックス＝男女の区別がないこと。

問1 本文中に、⁽¹⁾母親には満足を与えられなかった。とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 大声で泣いている妹をいたわる姿に、姉らしい優しさや健やかな成長を感じとってうれしく思ったから。

イ 私が姉のコートの裾をつかんでいる姿が、「おそろい」の服を着ている姉妹の喜びを表わしていたから。

ウ 「おそろい」の服を着て寄り添っている姿が、母親の思い描く姉妹らしいイメージにかなっていたから。

エ 服を目印として互いをすぐに見つけ駆け寄る姉妹の姿に、コートを着せたことでの安心感を抱いたから。

問2 本文中に、⁽²⁾ありすぎるのとなさすぎるのの両方だろう。とあるがどういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 娘たちの将来の成長を見越した周到さと、姉妹二人の気持ちにはまるで構わない無関心とが存在しているということ。

イ 姉妹を思う過度といえるほどの愛情と、コートが本当に必要かどうか気にしない無頓着とが存在しているということ。

ウ かたくなに「おそろい」のルールを守るがんとこと、多額の出費もいとわれない大らかさとが存在しているということ。

エ 「おそろい」によって姉妹を分け隔てしない思いやりと、好みの服を着させる自己満足とが存在しているということ。

問3 本文中に、⁽³⁾逃れようのない宿命の重さ。とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 母が実家に金をねだってまでそろえてくれたコートを大切にできていかなければならないという重い責任感。

イ 妹として生まれた自分自身の立場はどうしても変えることができないという不本意な運命に反発する思い。

ウ 「おそろい」を着た仲良し姉妹として母親から期待されている役割を演じなければならないという使命感。

エ 今後ずっと姉と「おそろい」のコートを着続けなければならないという定められた将来への重苦しい思い。

問4 本文中に、私は姉と違う人生を生きていることを実感していた。とあるが、その理由を説明したものとして適当ではないものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 新品のコートを着ることができたので、やっと自分だけの新たな人生が始まるかのように感じられたから。

イ これからは「おそろい」の服を着なくてもいいので、姉とは縁が切れて一人で生きていけると思ったから。

ウ 「おそろい」のコートが実は姉よりも自分に似合っており、初めて出会う人の前では嫌ではなかったから。

エ 姉が冬用のジャケットを買って、姉とは違う服を着ることになったため、とても新鮮な気分になったから。

問5 本文中に、⁽⁵⁾もしかしたら、いや絶対、とあるが、この表現には「私」のどのような思いが込められているか。説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 姉の本心はもはや確かめようもないはずなのに、自分では揺らぐことなくそれを確信できるという思い。

イ 姉が最後のコートを着なかつた理由に疑いが生まれたが、姉への思慕からそれを打ち消そうとする思い。

ウ 姉の死後によりやく真実に気づき、幼い日の思い出をよみがえらせて悲しみを振りはらおうとする思い。

エ 不意に姉の本心に思い当たったことで、心の中でわだかまっていた不満も消え去ってくれるという思い。

問6 本文中に、⁽⁶⁾私たちの人生の重なつた、入れ子人形 とあるが、この作品において「入れ子人形」はどのようなことを象徴しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 姉妹に対する母の格別な思い入れが、母から姉へ、姉から妹へと引き継がれるように伝わって人生が重なるように織りなされていたこと。

イ 「おそろい」によってかたく結ばれていた姉と妹の間柄は時を経る中で変容していったが、幼かつたころの思い出が二人を支え続けたこと。

ウ 姉妹が順序よくサイズの違う「おそろい」を着てそれぞれの成長を遂げる中で、姉が妹を優しく包み込むような関係は変わらなかったこと。

エ 姉のおさがりの服を着ていたため、常に姉からの束縛を受けているように感じられて、自分らしさを出すことができないまま成長したこと。

問7 この文章の内容や表現の特徴に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選べ。

ア 母と姉のユニークな人物像が妹の視点からユーモアを交えて語られ、互いの愛情がすれ違っていくさまに現代の家族のあり方というテーマが託されている。

イ 家族との印象深いエピソードを回想し語っていく中で、姉妹の間に存在する愛情の確かさを見いだしていった妹の心情が率直な表現によって描かれている。

ウ 母と娘、姉と妹という女性同士の肉親に生ずる独特な愛憎がそれぞれの視点から語られていき、やがて訪れる運命的な結末がドラマチックに描かれている。

エ 妹が姉に対して持つうらやみや憧れが少し甘えた口調で語られ、物語の後半でそれが大人びた調子に変化することにより妹の成長が浮き彫りにされている。